

論文

中国語教育研究

—現代中国学部における試み—

中川 裕三 安部 悟 劉 柏林
王 硯農 今泉潤太郎

要 旨

愛知大学現代中国学部では、中国語で中国人と日中間の様々な問題について議論できる能力を備えた人材を4年間という短期間で養成するため、中国語必修科目については、学部開設以来、1年半の短期集中型モデルを採用している。これは2002年度より実施の新カリキュラムにおいても基本的に踏襲されているが、そこでは従来2セメに配置されていた中国での語学研修である現地プログラムを3セメに配置換えし、日本で行われる1セメ、2セメの中国語教育を「基礎」、3セメの中国現地プログラムをその「応用・実践」と位置付けている。

本稿では、まず、このカリキュラム改編を契機に本学部中国語担当教員が中心となって行った理想的中国語教育モデルに関する議論の一端について紹介する。次に、現地プログラムを3セメに置くという条件の下で我々が辿り着いた1セメ、2セメの具体的中国語教育モデルについて、その全体像を明らかにした上で、それぞれの科目の内容について、我々が新たに開発した『中国語課本』、『留学去』、『中国語Ⅷ』という3種類の教材との関係から具体的に紹介する。

キーワード：短期集中型、理想モデル、独自教材、モジュール構造、実践会話、
中国語CAI

0. はじめに

愛知大学現代中国学部（以下、現中）の教育目標は、21世紀にかけて問題が山積みする日中両国の架け橋の役割を担いうる、優れた人材を養成することにある。この教育目標は、具体的に言い換えると、中国語で中国人と日中間の様々な問題について議論できる能力を備えた人材を養成するということである。そのような人材を養成するためには、現中では4年間という短期間で中国語教育と専門教育を両立させなければならないことになるが、既存の外国学部や文学部などの従来型教学モデルではそれを実現することは難しい。その解決策として、現中では中国語の基礎を1年次前後期と2年次前期のわずか1年半で教える短期集中型教育を採用した。それを可能にしたのは、中国天津の南開大学で行う現地プログラム（以下、現プロ）の実施であることは言うまでもないが、2002年度施行の新しいカリキュラム（以下、新カリ）では、従来のカリキュラム（以下、旧カリ）における中国語教育システムを抜本的に見直す中で、現プロを従来の2セメから3セメに配置換えするという決定がなされた。そこで、現中の中国語担当教員が中心となって、理想的な中国語教学モデル（以下、理想モデル）を模索することになり、それは実際には、1999、2000年度愛知大学研究助成A-11（以下、A-11）を受け、共同研究という形で、資料収集、討論、教材作成などが行われた。本稿では、そこで模索された教学モデルについて、現中における教材との関係を中心に紹介したい。

本稿は、A-11の研究成果のまとめとして、そのメンバーによって分担執筆したものである。現中の教材に関する部分については、基本的に、その教材の著者が執筆した。

1. 理想モデル

1.1. 中国と日本の大学における中国語教育の現状

まず、中国と日本の大学における中国語教育の現状を概観してみたい。¹⁾

中国の大学における外国人を対象とした中国語教育（以下、対外漢語）では、中国人教員によって直接法（使用言語は中国語）で行われるのが一般的である。一方、日本の大学における中国語教育²⁾では、科目によって日本人教員もしくは日本語がたんのうな中国人教員が間接法（使用言語は日本語）で教える場合、中国人教員が直接法で教える場合、両者を組み合わせた場合など様々である。

次に、中国の対外漢語では、1週間の授業はほとんど全てが中国語の授業である。月曜から金曜まで午前中はすべて必修の授業で埋まり、午後も曜日によって選択の授業が入る、というのが最も典型的なカリキュラムである。大学によって差はあるものの、中国に留学

した学生は毎日4コマ（1コマ50分）以上は中国語の授業を受けることになる。一方、日本の大学では、中国語以外にも一般教養や専門の講義があるため、中国語の授業は週3コマから6コマ程度（1コマ90分）の範囲内に収まるのが一般的である。³⁾

また、中国では独自に開発した教材（以下、独自教材）を用いている大学と、対外漢語において権威有る大学または機関が開発した教材を用いている大学が大勢を占めているのに対し、日本の大学では、第1外国語の場合でさえ独自に教材を開発している大学は少なく、中国や日本で市販されている教材（以下、市販教材）を組み合わせ用いている大学が大勢を占めている。

1.2. 一般的理想モデル

以上のような、中国と日本の大学における中国語教育の現状を見据えつつ、中国語教育の一般的理想モデルというものがあるのか、また存在するならばそれは一体どのようなものなのか、ということについて、我々はまずいくつか論点を抽出した上で、主としてその長所と短所について議論を行った。以下はそのときの議論を本稿との関係から集約したものである。

① 教学地（日本か、中国か）

〈日本〉

長所：中国語と同時に日本人の大学生として必要な教養・専門科目を学ぶことができる。

短所：授業以外に中国語を用いる機会がほとんどない。

〈中国〉

長所：中国語のカリキュラムが充実していて、授業以外にも中国語を用いる機会が多い。

短所：日本人の大学生として必要な教養・専門科目を学ぶ機会がない。

② 教員と教授法（日本人が日本語で教えるか、中国人が中国語で教えるか）

〈日本人が日本語で教える場合〉

長所：日本語による文法説明は学生の理解を助ける。

短所：日本人が中国人教員のように実践会話を教えるには無理がある。

〈中国人が中国語で教える場合〉

長所：生きた中国語を教えることができる。

短所：中国語による文法説明は特に初級者にはわかりにくい。

③ 授業内容とコマ数（どのような授業が週何コマ程度適当か）

授業内容：文法、会話、作文、読解、発音、CAI⁴⁾など。

コマ数：毎日1コマは必要。

④ 使用教材（独自教材か、市販教材か）

〈独自教材〉

長所：実際の目標（レベル）やカリキュラム（コマ数）に合わせることができる。

短所：開発に時間と労力を要する。

〈市販教材〉

長所：開発の手間がかからない。

短所：実際の目標やカリキュラムとピッタリ合うものが少ない。

議論を通して我々が到達した結論はこうである。即ち、一般的理想モデルというものとは存在しないか、もしくはそのようなものを作ったとしても現実的な意味はないが、具体的な目標を達成するための理想モデルならば存在しうる、というものである。要するに、机の上で理想を追求すればきりがなく、それを突き詰めれば、見た目にはすばらしくても、全く実現不可能な理想モデルが出来上がってしまう。つまり、まずはどのような人材を養成するかという具体的な目標が決まり、それを実現するに当たっての種々の制約や条件が示されてはじめて、実現可能な理想モデルを作成することが可能になるのである。

1.3. 現中における中国語教学モデル

では、現中の新カリのように、3セメで学生を現プロに参加させるということを前提にした、1セメ、2セメの中国語教育はどのようなべきか、我々はそのような観点から議論を行った。その結果我々が辿り着いた教学モデルは次のようなものである。⁵⁾

このモデルは、1セメ必修4コマ、選択1コマ、2セメ必修4コマ、選択1コマという条件に基づいて作成した。⁶⁾

	内 容	必修／選択の別, 教科名	担当教員
1セメ	1 発音・文法基礎	必修, 中国語 I	日本人教員
	2 発音・文法基礎	必修, 中国語 II	日本人教員
	3 発音・会話基礎	必修, 中国語 III	中国人教員
	4 発音・会話基礎	必修, 中国語 IV	中国人教員
	5 発音練習	選択, 中国語発音 I	T.T. ⁷⁾
2セメ	1 文法基礎	必修, 中国語 V	日本人教員
	2 会話基礎	必修, 中国語 VI	中国人教員
	3 留学会話	必修, 中国語 VII	中国人教員
	4 CAI	必修, 中国語 VIII	日本人教員
	5 発音練習	選択, 中国語発音 II	T.T.

このモデルの特徴は、次のように要約できる。

① 日本で行う1セメ、2セメの教育を基礎、中国で行われる現プロを応用・実践と位置付

- けたことにより、日本と中国における教育のそれぞれの長所を生かすことができる点。
- ② 各科目の役割分担を明確にし、難易度を考慮して適切に配置したことにより、中国語の基礎を無理なく、効率的に学ぶことができる点。
 - ③ 日本人教員と中国人教員の役割分担を明確にすることにより、それぞれの長所を生かすことができる点。

共同研究A-11では、このモデルに合わせて、次のような教材を開発した。⁸⁾

発音基礎	}	→『中国語課本』
文法基礎		
会話基礎		
留学会話		→『留学去』
CAI		→『中国語Ⅷ』

このように独自教材を開発することにより、授業回数などを現中のカリキュラムの実際に合わせることができるだけでなく、教材作成時に各担当者が連携を取り合うことにより、意図的に他の科目を補ったり、更に強化したりすることができる。

以下では、それぞれの科目の内容について、各教材の目的、構成などから具体的に紹介する。

2. 『中国語課本』：中川・王 (2003)⁹⁾

前節で述べたように、現中の各科目は明確な役割分担がなされており、全体としてモジュール構造をなしている。その中でも、『中国語課本』は現中の中国語基礎教育の中核を担う存在と言える。

『中国語課本』は、「発音篇」、「文法篇」、「会話篇」の3つの部分から構成されていて、実際の授業は、1セメ2セメを通して、各クラスを日本人教員1人と中国人教員1人がペアを組み、各課を日本人教員が先行する形で進行する。「発音篇」は、日本人教員の授業で音節の構造、ピンインの規則、発音の仕方などについて解説し、中国人教員の授業でそれを徹底的に練習する。続く「文法篇」と「会話篇」は、各課に配置される構文及び文法項目が対応していて、日本人教員が「文法篇」で基本構文や基本的文法項目について教え、中国人教員が「会話篇」で基本構文を用いた実際の会話や文章を教える。

2.1. 発音篇

〈目的〉

複雑な中国語の音節体系を無理なく確実に習得させる。

〈構成〉

第1課：声母と韻母（1）：「漢字とピンイン」、「声調（第1声～第4声）」、「単母音」の説明、及び単母音に第1声から第4声までの声調を付けた発音練習とヒヤリングドリル

第2課：韻母（2）：「複母音」の説明、及び複母音に第1声から第4声までの声調を付けた発音練習とヒヤリングドリル

第3課：韻母（3）：「鼻音（n, ng）を伴う韻母」の説明、及びそれに声調を付けた発音練習とヒヤリングドリル、「韻母表」による韻母のまとめ

第4課：声母：「声母表」による声母の説明、及び「無気音と有気音」、「そり舌音」、「声母を伴った場合にピンインの綴り方が変わる音節（声母+iou, uei, uen, ü）」の発音練習とヒヤリングドリル

第5課：音節：「ピンインの綴り方」の注意点の確認、及び「中国語音節表」による単音節のまとめと練習

第6課：2音節語：「轻声」で終わる2音節語のパターン、「第3声の連続」のパターンの説明、及び「2音節語の声調パターン」の練習とヒヤリングドリル、「不」+第4声の変化、「一」の変化、「r化」の説明と練習

〈特徴〉

- ① 第1課から第6課の各課を、まず日本人教員のコマで説明し、続く中国人教員のコマで徹底的に練習するという贅沢な構成をとり、合計12コマを費やしている点。
- ② 第1課から第4課までで中国語の音節の構成要素を個別に教えた後、そのまとめとして第5課で音節表によって全ての音節を練習し、さらに単音節からセンテンスへの橋渡しとして、第6課で2音節語の20パターンを練習する点。

2.2. 文法篇

〈目的〉

中国語の基本構文を用いて単文を自由に組み立てられるようにし、それを用いて質問、応答する基礎を作る。

〈構文及び文法項目の配置〉

第1課：“是”の文（1）：「人称代詞」とそれを主語とした“是”の文、「副詞の位置」、「諾否（YES-NO）疑問文」

第2課：“是”の文（2）：「指示代詞」とそれを主語とした“是”の文、「構造助詞“的”」、「疑問詞疑問文」

第3課：“是”の文（3）：“的”の省略、「場所を表す指示代詞」とそれを主語とした“是”の文、「四つの疑問文（諾否疑問文、疑問詞疑問文、反復疑問文、選択疑問文）」

- 第4課：“有”の文(1)：「数詞」,「量詞：“个, 口”」, 所有を表す「“有”の文」とその「常用疑問文」
- 第5課：“有”の文(2)：「量詞：“枝, 张, 本”」, 「単純方位詞：名詞＋“上, 里”」, 「概数の“多”」, 存在を表す“有”の文とその常用疑問文
- 第6課：動詞述語文(1)：「連体修飾語：指示代詞＋量詞＋(中心語)」, 「時間名詞：午前, 午後」, 「時間名詞の位置」, 「動詞述語文：動作動詞」とその常用疑問文
- 第7課：動詞述語文(2)：「時間名詞：日, 年, 週, 月」, 「動詞述語文：移動動詞, 存在動詞」とその常用疑問文
- 第8課：形容詞述語文：「形容詞述語文」とその常用疑問文
- 第9課：主述述語文：「主述述語文」とその常用疑問文
- 第10課：名詞述語文：「時間名詞：年月日, 曜日, 時刻」, 「名詞述語文」とその常用疑問文
- 第11課：前置詞フレーズ：「前置詞フレーズ」を用いた文とその常用疑問文
- 第12課：二重目的語文：「概数の“几”」, 「二重目的語文」とその常用疑問文
- 第13課：連動文：「連動文」とその常用疑問文
- 第14課：完了, 実現相の“了”：「完了, 実現相の“了”」を用いた文とその常用疑問文
- 第15課：進行相の“在～呢”：進行相の“在～呢”を用いた文とその常用疑問文
- 第16課：持続相の“着”：「合成方位詞」, 「持続相の“着”」を用いた文とその常用疑問文
- 第17課：経験相の“过”：「経験相の“过”」, 「動量補語」を用いた文とその常用疑問文
- 第18課：“是～的”構文：「“是～的”構文」とその常用疑問文
- 第19課：助動詞(1)：「～できる：“会, 能, 可以”」を用いた文とその常用疑問文
- 第20課：助動詞(2)：「～したい：“想, 要”, ～すべき：“要, 应该”」を用いた文とその常用疑問文
- 第21課：結果補語：「結果補語」を用いた文とその常用疑問文
- 第22課：方向補語：「単純方向補語“来, 去”」を用いた文とその常用疑問文
- 第23課：可能補語：「可能補語」を用いた文とその常用疑問文
- 第24課：様態補語：「様態補語」を用いた文とその常用疑問文
- 第25課：時量補語：「時間の単位」, 「時量補語」を用いた文とその常用疑問文
- 第26課：比較：「比較：XとYが同じ場合, XとYに差がある場合」を表す文とその常用疑問文
- 第27課：“把”構文(1)：動詞の後ろに結果補語, 単純方向補語がくる「“把”構文」とその常用疑問文

第28課：“把”構文(2)：動詞の後ろに移動後の位置や変化後の姿を表す成分がくる「“把”構文」とその常用疑問文

第29課：兼語文：“叫，让，请”及びその他の動詞を用いた「兼語文」とその常用疑問文

第30課：“被”構文：「意味上の受身文」及び「“被”構文」とその常用疑問文

〈課の構成〉

- ① 質問とそれに対する肯定、否定の応答から成る5つの対話文
- ② 文法のポイント
- ③ 常用疑問文（諾否疑問文、反復疑問文、疑問詞疑問文、選択疑問文）

〈特徴〉

- ① 中国語の基礎として習得すべき構文及び文法項目をほぼ網羅している点。
- ② 構文及び文法項目の難易度を配慮して配置し、構文によっては数回に分割した点：「“是”の文」(3回)、「“有”の文」(2回)、「動詞述語文」(2回)、「助動詞」(2回)、「“把”構文」(2回)。
- ③ 構文中心に各課を構成し、基本構文ごとにその肯定形式、否定形式、及び常用する疑問形式を示した点。
- ④ 3セメの現プロに配置してある構文であっても、現地での中国語による説明で理解が難しいと考えられるものについては、部分的に現プロの内容と重複させた点：「“把”構文」，「兼語文」，「“被”構文」。
- ⑤ 発音練習の便宜を考慮し、漢字とそのピンインを左右に分けて配置した点、また5つの対話文では、ピンインに頼らず漢字を見て正しく発音できる基礎を作るため、漢字に声調符号のみをルビのように付けた点。
- ⑥ 常用単語の定着を図るため、新出単語の量を少なくし、複数の課で重複して用いるようにしている点。

2.3 会 話 篇

〈目的〉

文法篇で学んだ知識の基礎を固めると同時に、会話や文章に伴うイントネーションや主語、目的語の省略などを学び、中国人教員を相手に中国語を実践で用いる練習をする。

〈構文及び文法項目の配置〉

本編の各課には対応する文法篇の各課で提示したのと同じ構文及び文法項目が盛り込ま

れている。

〈課の構成〉

例えば：第7課 他今天不来

1. 会話文

A：你找谁？

B：我找丁一。

A：他今天不来。

B：他明天来吗？

A：来。

B：他明天什么时候来？

A：下午来。

2. 文章

我今天没有课，不去学校，在家。上午我记生词，背课文，下午做练习，写汉字。
晚上休息，看电视，听音乐。

3. 新出単語

找 zhǎo [動] ～をたずねる，さがす

丁一 Dīng Yī [固名] テイ・イツ

〈特徴〉

- ① 実際に用いられる中国語の例として，会話文だけでなく文章を配置した点。
- ② 学生の理解が深まるよう，会話文と文章の中に同じ構文や文法項目をできる限り多く盛り込んだ点。
- ③ 中国人教員が教えやすいように，新出単語に日本語訳をつけた点。
- ④ ピンインに頼らず漢字を見て正しく発音する基礎を作るため，会話文と文章にはピンインを付けず，声調符号のみをルビのように付けた点。

2.4. 今後の課題

文法篇，会話篇では各課が終わるごとに，そのまとめとして，「練習問題」を配布している。現在は，それをどのように利用するかは担当教員に任せており，宿題としたり，次の時間に小テストとして実施したりしている。これにより授業外での学生の毎日の学習を促すことができているが，それをどのように利用するのがより効果的か，また現在のように配布するのがよいか，それともテキストに盛り込むのがよいか，ということについては，

今後の検討課題である。

発音篇が終わった時点と文法篇、会話篇の各第10課が終わった時点で2回の確認テストを行っている。¹⁰⁾ 前期試験の前に2回のハードルを設定することにより、前期試験の成績を高めることができている。

この確認テスト、及び学期末試験は1学年8クラス統一で行われているが、統一試験を実施するためには、各クラスが同一歩調で授業を進める必要がある。担当教員が何らかの事情で授業を行うことができない場合、現在は休講措置を極力とらず、基本的にペアの教員が代講することになっている。しかし、それが長期に渡る場合はペアの教員の負担が増えすぎることになるし、専任教員の削減により中国人教員のコマを若干名の非常勤講師が担当しているが、非常勤講師に授業の肩代わりをお願いすることは不可能である。このような体制で同一歩調を堅持できるかどうか今後の最大の課題と言えよう。

3. 『留学去』 王硯農・劉柏林 (2003)¹¹⁾

『留学去』は、3セメに実施される南開大学での現プロに対応する形で開発編集したテキストであり、そこで追求したのは目的が明確であることと、日常生活の中で実際に使われること、つまり実用性であった。この教科書は2セメに実践会話用の教材として使用され、その学習を終えた学生が現地で可能な限り自由にコミュニケーションができることを目的としている。日本で普通に生活している学生にとって、中国語教育のための理想的な言語環境があるわけではなく、授業で中国語の会話練習を徹底的に行うことが極めて重要になってくる。授業自体が明確な目的性を持ち、そこで使われる中国語には実践的な、まさに生きた中国語が要求されることになる。学生が自ら積極的に声を出して会話練習を行い、中国語のコミュニケーション能力を可能な限り高めることは、初・中級中国語教育の中心的目的である。そのような授業を成立させるには、テキストにも生き生きとした真実性、実用性や面白さが必要で、さらにどのように学生の勉強意欲を引き出すかが編集のポイントとなる。テキストを編集する際、私たちは以下のことに特に留意した。(1) 留学先の状況に即応できるテーマの選定、(2) 学生のニーズとレベルに合わせた内容、(3) 言語構造の把握よりも反復練習、(4) 言語環境の真実性の追究、である。

3.1. 留学先の状況に即応できるテーマの選定

現プロは、中国語教育のための理想的な言語環境のもとで、その身を中国文化の中において全身で中国語や中国そのものを学ぶ機会であり、現中のカリキュラムにおいて重要な位置をしめる。それをより効果的に実現させるためには、これまでの現プロの実施状況を

ふまえると、2セメに実践的な中国語会話の訓練を行うことが不可欠と考えられる。現地でのコミュニケーションを目的とする語学教育というのが、このテキストの基本的な出発点である。大学入学から半年しか経たない学生が、その半年後には中国留学を控え、留学先で中国人の先生や学生に会った時どのようにコミュニケーションすればよいのか、現地での留学生活にどのように対応すればよいのか分からないといった不安を感じるとしても不思議ではない。そういった不安に適確に対処できるように、現地で学生が実際に遭遇するであろう場面を想定し、そこでの基本的なコミュニケーションに欠かせない言語表現を精選している。各課のテーマは以下の通りである。

- 第1課 自己紹介：「我姓～」(私は～と言います)
- 第2課 場所を聞く：「哪儿」(どこ、どこに、どこで)
- 第3課 自分が何かしたい：「我想～」(私は～がしたい)
- 第4課 自分のできることを相手に言う時に：「我会～」(私は～ができます)
- 第5課 相手に何かを頼む：「能～吗」(～てくださいますか、～ていただけますか)
- 第6課 相手に許可をもらう：「～好吗」(～ていいですか、～よろしいですか)
- 第7課 時間を聞く：「什么时候～」(いつ～、何時に～、何曜日に～)
- 第8課 所要時間を聞く：「～要多长时间」(～どれぐらい時間がかかるか)
- 第9課 手段を聞く：「怎么～」(どのように～、どう～)
- 第10課 方法を聞く：「～怎么办」(～、どうしよう)
- 第11課 自分の感じたことを言う：「有点儿～」(少し～)
- 第12課 自分の好きなことを言う：「喜欢～」(～が好きだ)
- 第13課 総復習「综合练习」

中国語でも基本的なコミュニケーションに使われる表現は多いが、以上の項目はそれらの中から、学生が現地プログラムに参加した際に必ず出会うであろう状況と表現を厳選し、さらにそれに関連した使用頻度の高い表現を集めたのである。セメスター毎に13週の講義が行われるので、1つの課を1回で教えると考え、12課分のテーマが準備されている。

3.2. 学生のニーズとレベルに合わせた教材内容

学生が何を学びたいか、何に興味を持っているかという問題は編集者が最初に考えるべきことであろう。1セメ終了時点では、学生の会話能力がまだ劣っているので、留学を前にして何より学んでおきたいのは、留学先で困らないような生活にかかわる中国語表現である。学生は初めて海外に行く者がほとんどで、現地の環境や状況があまり分からず、また自分のコミュニケーション能力にも自信を持たず、不安を感じる者が少なくない。そうした学生の不安を解消するため、現地の状況を反映した内容を対話形式で本文に取り入れ、

語学力の向上と同時に現地の生活が理解できるように工夫してある。本文となるスキットの背景となっているのは、学生が実際に行くことになる中国の天津市であり、会話の主人公は学生である。このような教材を使用することによって、学生の中国語に対する興味や意欲を引き出すと共に、留学先の生活や文化にも興味を持たせることができるという相乗効果が期待できる。本文の設定を具体的に言えば、「自己紹介」、「宿舎での会話」、「食堂での会話」、「買い物での会話」、「町のレストランでの会話」、「自転車の修理屋での会話」、「宿舎での会話」、「道を尋ねる」、「バスに乗る」、「病院での会話」などとなっている。

3.3. 言語構造の把握より反復練習

テキストの各課は以下の構成になっている。

1. 新出単語 (20個前後)
2. 常用文型 (5文型)
3. スキット (10句前後)
4. 練習
 - ①中国語で答える問題 (5問)
 - ②文の完成 (5問)
 - ③中国語訳 (5問)
5. 中国事情の豆知識

『留学去』では、実用性重視の観点から、言語構造の把握にはあまり力点をおかず¹²⁾、精選された基本文型を丸ごと覚え込むことを学生に求めている。そのため、各課で扱う常用文型は、中国人の日常生活で常用される文型のうち、特に重要なものを5パターンに絞って例示してあり、学生が消化不良にならないように配慮している。“少而精”を原則とし、授業中に教員の指導のもとで単語の置き換え等を繰り返し行い、それらの文型を使った自然な会話ができるようにしている。文型を選ぶ際に中国語の特徴がよく現れている表現・内容を優先して採用し、合わせて学生が現地についての活動順序に従って場面を設定しており、授業で覚えた表現をすぐに実践で使えるようになっている。文法的に多少高度なものや学生が間違いやすいと思われる表現も含まれているが、他との対比や場面設定を分かりやすくする等の工夫で、正確な理解ができるように配慮した。これらの常用文型を、スキットや練習問題も使いながら、授業中に学生が自分の言葉として発話できるまでしっかり練習させることがポイントである。

3.4. 言語環境の真実性の追求

教室での言語教育は真のコミュニケーションではないが、制限された環境を生かした

がら、真のコミュニケーションにできるかぎり接近することを目指すものであり、学生が実際のコミュニケーションの場で臆することなく中国語で会話できるような、基本的かつ習熟した表現力を身につけることが求められている。本教材編集の際、言語の内在的環境（文、語句、文法など）と言語の外在的環境（会話の時間、場所、場面、対象、話題など）を自然な形で融合させることをいつも念頭に置いた。学生がこの教材の学習を通して、中国語の発音や表現力を高めるだけでなく、中国の大学、中国人のものの考え方、天津の町の様子、中国の交通ルールなども理解できるように、スキットの内容を実際の生活に即したものにし、また「豆知識」という形で様々な情報を与えるなど工夫しており、真実性の追求が学生により良い効果をもたらすことを期待している。

今後の課題として、内容をさらに充実させ、その内容に合ったビデオなどを作製できれば、教学の効果がより一層あがるのではないかと思う。

4. 『中国語Ⅷ』：安部・吉川（2003）¹³⁾

中国語CAI科目は、必修科目の一つとして、現カリキュラムでは、現プロ出発前の2セメに配当されている。この科目の目的は、中国語運用能力を向上させると同時に、中国語入力、編集といった日常レベルで必須の技能を習得させることである。

この科目で使用するソフトウェアおよびコンテンツ、コンテンツ・データなどは独自に開発した。とりわけコンテンツに関しては、『中国語Ⅷ』での課文の文法項目、提出順序などに関しては、『中国語課本』中川・王（2003）を参照しながら、3セメでの現プロに参加した際に、実際に中国現地でよく出会うような場面、即ちよく耳にし、口にするであろうという内容を設定した。

4.1. 中国語CAI

中国語情報の発信・受信に関しては、日本語環境のコンピュータにおいて、どのように中国語を表示、入力させるかということから始まり、情報検索、分析、データ処理といった技術的内容を含んでいる。また、文字化けといった現象に見られる文字コードについての諸問題を理解する必要もある。中国語の情報処理能力は、中国語運用能力と情報処理技術の双方に関わる。限られた授業回数の中で、こうした技術系項目を網羅的かつ詳細に扱うことができるわけではない。そこで、中国語と情報リテラシというカテゴリから、以下の四つの区分を想定できるであろう。

- ①中国語ができる、情報リテラシがある。
- ②中国語できない、情報リテラシがある。

③中国語ができる、情報リテラシがない。

④中国語ができない、情報リテラシがない。

①では、IME¹⁴⁾の切り換え、選択、中国語表示、フォント指定、エンコード指定、Web検索ができることなどが最低条件であろう。②では、IMEを選択できても、中国語を打てないし、また表示されているのが日本漢字なのか、中国漢字なのか判別できない場合すらある。③では中国語でメールが送れない、かりに送信できた場合でも、文字コードを意識しないので、受け取った相手が文字化けすることに気づかないなどのケースが考えられるであろう。

以上の概念類型にあつては、大雑把に「できる」、「リテラシがある」としたが、現実には、それぞれの区分には程度差が存在する。デジタル・コミュニケーションにあつては、コミュニケーション能力の一領域として、コンピュータで文字入力できるということが、最低限必要とされるのであり、その能力育成は、なにも情報リテラシのみで解決されるものではなく、中国語教育でも解決されるべき課題なのである。つまり、中国語を入力できる能力の育成ということであり、中国語入力という技能面を訓練しながら、語学練習ともなることが中国語CAIの課題の一つとして抽出される。

現中における中国語CAIとしては、入力という側面から、IMEの種類、IMEの切り換えと選択、フォントの設定、半角・全角文字の違い、エンコードと文字化けということ、技能面での基本的な学習項目として取りあげている。こうした項目は、ピンイン入力の際に必要な基本知識である。特に現地プロ参加後は、中国語環境のWindowsマシンで、日本語IMEを選択して、Webメールを利用するという実際のニーズへの基礎訓練ともなっている。

語学力向上という側面からは音声録音、単語、フレーズ、文章レベルでの反復練習を行っている。音声録音では、録音すること自体が楽しいということにとどまらず、録音した自分の音声を、担当教員や他の学生に聞いてもらうことで、正確な発音へのモチベーションを強化している。90分の授業で、音声・動画データを再生し、発音を録音し、自己の発声を改めて認識させること、文字、単語、フレーズ、文章の各レベルにおいて、音声データを繰り返し聞きながら、正しいピンイン表記の識別、正確なピンインの入力と漢字変換を反復練習させることを行っている。

リーディング、スピーキング、リスニング、ライティングの四技能に対しては、以下のようなタスクを設定することで対応している。

- ①耳で聞いた音を再現する。
- ②再現した音を確認する。
- ③聞いて内容を判断する。

- ④聞いた音を弁別する。
- ⑤聞いた音を入力する。
- ⑥聞いた音を漢字変換する。
- ⑦見た文字（中国漢字）を入力する。
- ⑧見た文字（中国漢字）を漢字（中国漢字）変換する。

①から④までは、通常の教室活動やL.L.設備を活用しても可能であろう。しかし、⑤以下の文字入力、また①から④であっても、ランダムに出題されるドリル練習や択一式問題での選択肢のランダム配置、ランダムに出題順を変更したりすることは、コンピュータを使う上での優位点となるであろう。CAIでは、コンピュータをオーディオ機器と同様に使うという部分とコンピュータの特性を用いる部分がある。前者では、動画、音声データの再生・録音に使用することであり、後者では、ドリル練習、択一式回答、そして速く、正確にピンイン入力で漢字変換すること、例えば時間測定、1文字入力される毎に正誤を判定することなどである。

4.2. ソフトウェア概要

これまでに「漢語之星」（1998年—2002年）¹⁵⁾、「漢語之力」（2002年以降）という総称のもとに、そのプロジェクトに見合ったソフトウェアを独自に開発してきた。今次プロジェクトでは、2002年に「語言之力」を投入し、2003年は「詞句之力」を開発した。以下、各ソフトウェアについて概説する。

2002年秋学期からは、新カリ対応プロジェクトとして、「漢語之力」を総称にして、プログラミングソースから検討し、新たに「語言之力」というソフトウェアを開発した。基本的には「漢語之星」で実装し、効果のあったソフトウェアを選別し、その機能を発展統合させ、新機能を追加した。ソフトウェアならびにデータ（動画、音声、テキスト）はファイルサーバ上に配置し、CD-Rなどの外部メディアに収録するという方式はとっていない。¹⁶⁾ また、コンテンツ・データとソフトウェアは切り離せるので、別途、コンテンツのみを作成すれば、課文を増やすことも可能である。

〈「語言之力」概要〉

- Step01：動画再生、音声録音用ソフトウェア、MPEGファイルに対応。
- Step02：文単位で声調記号を入力する。
- Step03：文単位で、任意の箇所の空欄に該当する文字を入力する。
- Step04：文字単位でシャッフルされたものを、音声を聞き、その通りに入力する。
- Step05：課文全文を制限時間内に入力する。
- Step06：文単位で、任意の順番で、表示される文字を時間内にピンイン入力する。

「語言之力」では、これまでは、独立したソフトウェアであったものを、1つの実行ファイルに統合し、機能別に整理した。文章レベルでの声調入力、ランダムな穴埋め、文字整序を中心機能とした。これに、「漢語之星」で実装していた動画・動画録音機能と文章入力機能を追加改良し、さらに、練習用項目として、文字レベルでのピンイン入力を目的とした機能を搭載した。

2003年度にあっては、「詞句之力」として、プログラムソースコードレベルから書き直した。単語・フレーズレベルの声調、ピンイン識別を主とする機能を復活させ、これの表裏一体機能として、ピンイン入力を追加した。タイピング練習面では、表示された文章を制限時間内に再現入力させ、課文全文入力のための練習項目を設定した。次いで、課文のうちの異なり文字を抽出して、ランダムな20文字を漢字変換させる機能を新規に追加した。

〈「詞句之力」概要〉

声音之力：「語言之力」の「Step01」改良版，WindowsMedia9エンコード対応。

詞句之力：「Step02」改良版，ピンイン選択機能を再実装。課文中の単語・フレーズに対する声調，ピンイン選択ソフトウェア。

ピンインくん：課文中の任意の単語・フレーズに対するピンイン入力ソフトウェア。

復習くん：課文を文単位で漢字入力する。「漢語之星」で実装した部分を改良。

漢字くん：課文中の異なる文字から任意の20文字（変更可）に対する漢字入力。

詞句之力：「Step05」改良版。

4.3. 今後の課題

ブロードバンドの家庭への普及により、高速・大容量通信が可能となった。モバイルパソコン、それに携帯電話やPDA¹⁷⁾に代表される携帯情報端末を、ターゲットにした無線LAN及びホット・スポットで用いられるプッシュ型技術の展開など、個人を取り巻く情報通信環境は静かに大きく変動している。

これまでは、ファイルサーバを中心に、確実に動作することを主としてきた。今後も、この「確実に動作すること」を重視する方針に変更はないが、例えば、課外学習におけるコンテンツをWebベースで提供すること¹⁸⁾あるいはコンテンツ・データを学内でダウンロードし、PDAなどを用いて予習・復習などを、通学時に電車内で行うなどといった、課外学習時間を「いつでも・どこでも」設定できるようようなシステムを実験中である。これはWBT¹⁹⁾、E-Learningといった新たなネットワーク時代の学習スタイルに対応するための実験でもある。これにより、実際の授業時の学習密度をあげられるのではないかと考えている。

中国語カリキュラム全体で見た場合、それぞれの科目はモジュールとして機能しており、

ゆったりとした連携をはかっている。現中の中国語カリキュラムの特色がある点である。今後は、この面をより一層強化するためのシステム構築が必要となるであろう。例えば、それぞれの教材の内容に沿って課外練習できるような共通のソフトウェアならびに動画、音声、テキストデータを準備することが挙げられるであろう。さらに、ピンイン入力では、日本語入力や英文入力とは異なる運指が必要であり、例えば中文タイピング認定などの基準も必要となるであろう。

5. 今後の展望

以上の教材を用いた新カリは2002年度から施行され、新カリになって初の現プロが本年春学期に行われた。新カリ一期生の現プロ参加時点での中国語基礎力は、旧カリ生のそれを大いに上回っていたため、現プロでの彼らに対する評価は高く、彼らが従来よりも現プロでより多くのものを吸収してくれることを誰もが期待し、また確信していた。ところが、SARS（重症急性呼吸器症候群）の突然の発生蔓延により、現プロは4ヶ月の内のほぼ半ばにして切り上げられ、全員帰国のやむなきに至ったことは周知の事実である。幸い、受け入れ先である南開大学漢語言文化学院が10名の教員を派遣してくださったことにより、現プロの残りを名古屋校舎で実施することができたが、現プロの醍醐味はやはり授業外で中国語を実践できる環境にあり、その環境までを日本に持ち帰ることはできなかった。そのためか、現プロ終了時に実施されたHSK²⁰⁾では、期待したような結果を残すことができなかった。

本年度用いている『中国語課本』、『留学去』、『中国語Ⅶ』は、昨年度の教学経験を基にそれぞれ改訂を施してあり、本年度春学期に『中国語課本』を用いた中国語Ⅰ～Ⅳの前期試験の平均点及び合格率は、昨年を上回るものとなっている。来年度春学期に予定されている現プロにおいて、我々が新カリで示した新しい教学モデルの成果が確認できることを期待している。

また、現中の独自教材は、実際に教えて得たノウハウを盛り込んだ改訂を積み重ねた後、近い将来、「愛知大学現代中国学部中国語教科書シリーズ（仮称）」という形で公にして行く計画である。

註

- 1) 中国の大学における中国語教育については、主として、A-11により収集した資料参照。日本の大学におけるそれについては、主として、日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編『日本の中国語教育——その現状と課題・2002』参照。
- 2) ここでいう中国語教育とは、従来の中国語学科、中国文学科、あるいは現中のような中国語を第1外国語として位置付けた教育を指し、第2外国語におけるそれについては対象としていない。
- 3) ここでは、中国語未習者を対象とした1年生の授業を想定している。
- 4) Computer Assisted InstructionないしComputer Aided Instructionの略。語学教育ではCALL=Computer Assisted Language Learningという用語が使われる場合もある。
- 5) 現中旧カリの中国語教育モデルの全体像については今泉(2002)を参照されたい。
- 6) なお現中では、中国語エキスパート養成を目的として、入学前に中国語のレベルが一定レベル以上に達しているものについては、1セメ、2セメではこれと同一のカリキュラムの下で個別の対応を行っている。それについては中川(2002)を参照されたい。また4セメ以降は「中国語インテンシヴコース」を設けて対応している。
- 7) Temporary Teacher(外国語臨時教員)の略。中国語発音I、IIの授業は、中国の協定校から招聘した2名のT.T.が担当している。
- 8) 「中国語発音I、II」についても独自の教材を開発しているが、A-11のメンバー以外の教員が執筆したものであるため、その内容については割愛する。
- 9) これは中川・王(1997)を基に新カリに合わせて合本改訂された中川・王(2002)に部分的修正を施したものである。
- 10) 確認テストは文法篇と会話篇で独立して行っているので実質的には3回。
- 11) これは王・劉(2002)に修正を施したものである。
- 12) 言語構造の把握については主に『中国語課本』で行う。
- 13) これは安部・吉川(2002)に修正を施したものである。
- 14) Input Method Editorの略。
- 15) 詳細については、吉川(1998)参照。
- 16) 動画データは「MPEG1」と「WMV」形式、音声は「MP3」形式としたことでファイルサイズが小さくなったためである。
- 17) Personal Digital AssistantsないしPersonal Data Assistantsの略。
- 18) 語学専門書の出版社である語研が、語学教材の音声データをWebから配信するサービスを始めた。詳細は、<http://www.goken-net.co.jp/info/information.htm>参照。
- 19) Web Based Trainingの略。
- 20) Hanyu Shuiping Kaoshi(漢語水平考試)の略。中国政府が行っている中国語検定試験。

参考文献

今泉潤太郎(2002)「愛知大学現代中国学部における中国語教育——現状と課題」『日本の中国語教育

中国語教育研究

—その現状と課題・2002』日本中国語学会

- 中川裕三 (2002) 「中国語エキスパートを目指す学生への対応について」『日本の中国語教育—その現状と課題・2002』日本中国語学会
- 中川裕三, 王硯農 (1997) 『漢語課本』愛知大学現代中国学部中国語担当学会議
————— (1997) 『会話課本』愛知大学現代中国学部中国語担当学会議
————— (2002) 『中国語課本 (上・下冊)』愛知大学現代中国学部中国語運営委員会
————— (2003) 『中国語課本』今泉潤太郎監修, 愛知大学現代中国学部中国語運営委員会
- 王硯農, 劉柏林 (2002) 『留学去』愛知大学現代中国学部中国語運営委員会
————— (2003) 『留学去』愛知大学現代中国学部中国語運営委員会
- 吉川 剛 (1998) 「中国語CAIと語学教育用支援ソフトの作成」愛知大学情報処理センター紀要『コム』(第9巻第2号)
- 安部悟, 吉川剛 (2002) 『中国語Ⅶ』愛知大学現代中国学部中国語運営委員会
————— (2003) 『中国語Ⅶ』愛知大学現代中国学部中国語運営委員会